

あそ

6

2020



須賀忠男のBird Note



小さな群で
近くの公園に
もって来る
エナガ
小さくて
スマートな
可愛い鳥だ

あを

六月集

佐藤 喜孝

春の月

天窓に猫の乗ったる春の晝
けもの徑マツモトキヨシとドコモの隙間
無患子の花散る古き石の上

阜月空國から届く口塞
酔を貰うて蔭を拾うて曲ると家
肉賣場つぎは眼のある魚賣場
厚き本ほたるがほつとこぼれおつ
蟬の穴蟬の殻まで目でたどる
母の背にゐるは弟空襲裡
猫が手でちよんちよんさはる晝寝かな



「新社員」抄(二)

東京

篠田 大佳

助手席でぬひぐるみ抱き目借時
記憶から消せない言葉夏隣
夏きざす昔のことは聞かぬなり
風薫る旅の少女は笑まひけり
青葉冷夜は確かにやつてくる

石川

定梶じょう

愛鳥日

鳥 帰る 市政懇談会 終り
畦 塗って 風新しく 走りだす
覗きけりちくわの穴の向うがは
入学の帽子のあみだ正さるる
愛鳥日知ってや鸚鵡よくしゃべる

東京

須賀 敏子

四月尽

金網の米軍基地や揚雲雀
たんぽぽや図書館未だ閉じたまま
御衣黄の静かな雨に落花かな
居士大姉ラッキーマの墓余花の里
ハイキング句会も無くて四月尽

東京

田中 藤穂

春寒し

背後より僧の沓音花會式
春寒し阿修羅の像の細き腕
野良猫のそそくさ通る花杏
ヘルパーさん若し青葉の雨浴びて
ハルジョオンかたまり咲きて風少し



三重

長崎 桂子

春雪

ふっくりりと夕餉うれしい茨隠元
身を守る身支度行き交ひ花見かな
振り返し綿帽子のごと春雪
外出を控へる日日に菜種梅雨
スーパームーン大屋根に後光ふる四月

東京

森 なほ子

雑詠

背伸びしても青空ばかり芝桜
立ち話の声すぐわかり遅日かな
閑さや畑土濡らし春の雨
嘴のやうな芽を出し杜鵑草
ウイルスに分断されて卒業す

東京

赤座 典子

穂の芽

移しても移されてもと春暮るる
春深し奇数日ごとの内用葉
大部なるナポレオン伝夏隣
春野菜地産地消を応援す
穂の芽は陣中見舞小諸より

埼玉

秋川 泉

桜花賞

生まれたて春の満月もも色に
昼寝した子猫深夜は空を見る
花御堂釈迦立像に愁ひあり
巣ごもりて夢の中にも蝶の舞ふ
けがれなき女王生まれる桜花賞



埼玉

大日向幸江

花の雨

花の雨気ままに部屋の模様変へ
アイスクリームぺこちゃんの居るレストラン
捨てられた子猫にミルクスポイドで
目の見えぬ子猫のふれる熊のプーさん
自販機に浅蜷穴子と冷たい夜

東京

七郎衛門吉保

軒燕

春 嵐 二 転 三 転 暗 転 す
すぐ消えよ若芽に試練春の修羅
春逝くも飾りっぱなしのランドセル
子等の靴ブランド踏めず芝青む
ウイルスに負けじと来たり軒燕

東京

篠田 純子

浜防風

浜防風 天ぷらさくと香の清々
雀の名「ヨネ子」「ヨネスケ」風光る
ロックダウンありやなしやに花万朶
平成のカーテン洗ふ昭和の日
孫と読むカミユのペスト四月尽

蜆汁

佐藤 恭子

鳴いてるか笑ってゐるか蜆汁
白雨かな我が家見んとて外に出る
初旅や前触れもなく蚊の二匹
手底のかなたの母へ秋の風
卓の足一本宙に雪もよひ



朧月海の重さおもひをり 佐藤 喜孝

濃厚接触の有無を問はるる猫の妻 篠田 純子

春きざす文庫本読むホームレス 篠田 大佳

休刊日新聞受は覗いてみる 定梶じょう

落椿川鵜と共に潜りけり 須賀 敏子

もやしの根とり春愁を深めをり 田中 藤穂

春雷や地球の毒を消し賜もれ 長崎 桂子



春の星この保護犬を幸せに 森 なほ子

春愁なんぞと夫買うてくる花いっぱい 赤座 典子

うごめくや笹藪で鳴く春の猫 秋川 泉

マスクしてうつ向きがちの春の町 大日向幸江

志木街道歩道に威張る落椿 七郎衛門吉保

加賀町の石臼にある春の水 佐藤 恭子



水墨の紅い椿と白椿

佐藤喜孝

四月号に作者は「紅」の八句を投句されている。何故この時期に紅をと、怪訝に感じたが、あとがきを見て納得した。橋・雨・門・草・糸・動・目・棒ときて、題詠みシリーズ九回目の題が「紅」だった。白黒の墨色だけで、見る人に色彩を感じさせる水墨画。それを描き出す画家も素晴らしい。それを俳句の世界に持ち込み、読み手に色彩を感じさせている、俳人の感性も素晴らしい。(吉保)

公園の池の浚渫風光

大日向幸江

小一時間程で行ける身近に、善福寺公園、石神井公園、井の頭公園などがある。これらの公園は池と一体となつて、自然散策とかポート遊びが出来る。他方で、外来動植物を始めとした様々な投棄物により、池の環境が悪化しているとのこと。地元のボランティアとタレントが一緒になつて、池を浚渫するTV番組がある。画面越しではあるが、浚渫後の池からは風光る様が見えた。(吉保)

垂れ梅 武蔵野線の貨車続々

須賀敏子

武蔵野線は東所沢辺りを境に、府中方面は半地下状の路線が多く、景色は良くない。反対に浦和・

三郷方面は高架線路が中心で、電車から見る景色に変化が生まれる。昨年4月の吟行会場付近は、その始まり辺りになる。また、この辺りには何故か、垂れ桜とか、垂れ梅の木が多く見られる。垂れ花の縦方向と、武蔵野線特有の長い貨車の横方向。この組み合わせを狙うカメラマンも多い。(吉保)

ランナーのピンクのシューズ楡芽吹く

田中藤穂

東京オリンピックの、マラソン選手を決定する予選レースが一月にあった。選手の全員がと見えるほど、ピンクや赤色のランニングシューズで登場。この鮮烈な色と、跳ねるような姿の競い合いを、楡の木の芽吹きとする、作者の観察力と表現力は、衰えを知らないと言いたい。しかし、世界中の誰も予想し得なかった大会の延期。芽吹いた楡はどうなるのだろうか。(吉保)

料峭や磨き上げたる靴並べ

森なほ子

オシャレ好きの一人として、時期に見合った靴を選ぶこと、は重要なポイント。現役引退後のそれは、革靴からスニーカー類に移り、磨き上げる機会は減ってしまったが。作者は春を迎え、どこかへお出掛の予定が、あったのだろうか。何となく浮き上がる気持ちで、春向きの靴を磨いていたのに。それが、瞬く間に料峭の世界に様変わり。磨いて待っている靴がむなしく見える。(吉保)

沈黙の街の口笛あたたかし

篠田大佳

好きな歌の世界では、ジェリー藤尾の「遠くへ行きたい」や、水原弘の「黄昏のビギン」に出てくる、見事な口笛を思い浮かべる。しかし生の口笛はもう何十年も、聴いていないように思う。自分で吹いてみようとしてみたが、これも満足な音は出なかった。通常は賑やかな街にお住いの作者。沈黙の街に変わっているのだろうか。そして、どなたが口笛を吹いているのだろうか。(吉保)

水墨の紅い椿と白椿

佐藤喜孝

墨の濃淡だけで風景、人物などが描かれている水墨画。ここには紅と白椿が描かれています。艶かな葉も、すつきりと添えられていたりして。この水墨画は、作者の想像の産物でしょうか。もし、実在しているとしたら、是非見せていただきたいものです。(典子)

長き夜スノームーンに手を広く

秋川 泉

ネイティブアメリカンの農業歴では、二月のスノームーンを雪月と名付けているそうです。昨秋、泉さんにスノームーンという言葉を、初めて教わりました。我が家の窓の位置は、月が見えにくく、つい見過ごしてしまいます。泉さんが、包み込むように、月を愛でている様子が、伝わってきます。(典子)

正体の知れぬウィルス風信子

篠田純子

新型コロナウィルスという、少し前までは聞いたこともない、怖ろしいものが発生してしまいました。目には見えず、終わりも想像できない事態に、困惑するばかりです。正体の知れないものを、風の便りがどこからか運んできてしまった。地下からは、色とりどりの美しいヒヤシンスが姿を表わしているというのに。(典子)

春雷や点滴注射あとすこし

定樞じょう

点滴を受けている間は、動かずじっとしていなければなりません。例え雷が鳴っていたとしても。後どのくらいで終わるのだろうと、透明の袋をじっと眺めています。この状況は、点滴という言葉で、身動きの取れない今を、言い表わされているのではないのでしょうか。あとすこし、もう少しだからと、励まされております。(典子)

片隅の日向に小雀集ひをり

長崎桂子

近頃は雀を見ないと、ご近所の方とも話しているのですが、桂子さんは、子雀たちを見かける機会があったようです。その子雀たちは「この頃の人間は、大人も子供も皆マスクをしているね」と話しているかもしれません。(典子)

里神楽村に活気のUター

七郎衛門吉保

作者は生きてゐる現、同時代を大切に読む。わたしと同じ後期高齢者なのだが問題意識旺盛な若者である。普通の俳人なら里神楽がどうしたかうしたと書くところだが、作者は掲句のやうに書く。視点がちがふのだ。これを俳句に付度した目にしないほしい。人一倍険しい道を選択されたやうだ。(喜孝)

春暁の富士大きかり露天の湯

赤座典子

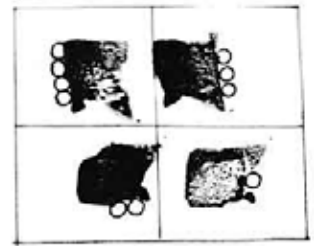
春暁の露天湯、さぞや爽快なことであらう。前日にも見たはずの富士山がいまは、大きかりである。時と場所、そして見るときの作者の状態により富士の大きさも変化するやうだ。(喜孝)



佐藤喜孝

篠田 大佳

東京のビル明かりして月おぼろ
A I に人と認識されず春
空とべば空の法律遅ざくら



◎「月」はいにしへより読み継がれて来た。人類が月の上に立とうと何ら色褪せることはない。雪月花を詠むのに組み合わせる対象物は風雅の道から大方それぬやう詠はれた来た。現代人は松や雲と同じく「ビル」をその延長線上で詠む。優しい「ビル明かり」である。

◎昨今の新語、造語の数は『広辞苑』も追いつかない。「AI」も「人工知能」といふ語彙を粉碎してしまった。人間が造ったAIなのに人間が利用する前にAIに傳いてゐる感がある。まだ「春」と詠まれてゐる内はよいが、すでにAIを利用して人と認識されない人をつくつてゐる国がありさうだ。

◎確かに地上はもちろん、地下も海中も法律の及ばないところはない。ドローンといふ得体のしれない物が出現したら対応する法律が作られる。「とべば」には自由に飛びたいのに………といふお

もひが込められてゐるか。季語は作者の癒しか。

須賀 敏子

コロナ風邪歴史に残る春となり
佐保姫や失つて知る常の日を
ステイホーム兜太の句集草の餅

◎作者と同じくわたしも五十年後、今の若者が昔を振り返つて孫や子供にこの頃の不思議な生活を話し聞かせてゐるのを想像した。大昔中野区の大久保通りに住んでゐた時、二十五センチの積雪で休校になったことを今でも思ひだす。なぜ二十五センチと覚えてゐるのかも不思議。歴史にも残る転換点になりさう。

◎さう、なにもコロナに限つたことではない。平凡な日々が続くことのありがたさ、大切さは失つてから知る。人の身勝手さであらう。春を「佐保姫」と擬人化することで温かさに包まれて癒される思ひがした。

◎この度のステイホームを有効に使はれた方とさうでない方では事後、国や会社や個人に差が出て来るやもしれぬ。意識改革のきっかけになれば。作者はお気に入りの兜太をじっくり読み直された。「草の餅」がステイホームに負けず逆に生かした生活をされてゐる証。三段切れの好例である。

田中 藤穂

どの人もコロナのマスク春寒し
ひらひらと初蝶鴨に追はれをり
夏菜莢の花匂ひくる夜の坂

◎「コロナのマスク」は無技巧のやうだが面白い。季語は心情に沿はせたが、沿はせすぎ。ずらすところに心のゆとり、誹諧といはれる面白みがある。だがやり過ぎてもしけない。いやその時の心情に合わすのがやはりベストか？。書いてゐる内に分からなくなった。

◎花の蜜を求めて飛ぶ時もひらひら。追はれて逃げる時もひらひら。危急の時もひらひらとしか飛べない初蝶。世情喧しい大国と小国の諍ひを重ねてしまった。

◎町を歩いてゐて花の匂に気が付くのは金木犀ぐらいかもしれない。嗅覚に自信がないのだがなぜか生瓦斯の臭には敏感。

きつと気持ちの良い夜であつたのだらう。坂としたところは心憎い。

長崎 桂子

菜の花を花瓶いっぱい歩の気分
賑賑し野菜の露店花水木
智恵子抄またまた開く連翹忌

◎「歩の気分」は少々強引に鑑賞させていただく。あまりに的外れでしたらお許しを。このままでと将棋の“歩”しか浮かばないので。菜の花を溢れるやうに花瓶に活けたら花野の中を歩いてゐる気分になられたのだらう。「菜の花をいっぱい活けて野の気分」。

◎野菜はおいしくそして美しい。武者小路実篤の気分になる。露店のある道の街路樹の水木も花盛り。わたしは料理が下手で面倒くさいので生で食べられる野菜は火を通さないでいただく。掲句の賑々しで数ばかりか野菜の形や色彩まで賑やかで目移りしさう。

◎連翹忌は四月二日、高村光太郎の忌日。智恵子忌でないところが面白い。“またまた開く”は“連翹忌”にかかる。上五、下五が名詞の時、私は上五で切れ、中七は下五にかかるやうに読めてしまふ。で「連翹忌またまた開く智恵子抄」今月はあを人の愛読書を二冊知った。

森 なほ子

父子行くやコロナの春を睦まじく

日本中春のマスクに覆はれて

靴下がどれも片方四月馬鹿

◎コロナウイルスがもたらすものは悪いことばかりではない。空気がきれいになった国があるとも聞く。動物園の動物たちもストレスが軽減されたのではないか。家にゐる時間の長くなったお父さ

んと、休日しかできなかった散歩を毎日でもできる。こんな風景を私もはたから眺めてゐて和んだものだ。

◎季語のこだはりを逆手にとつて“春のマスク”とは恐れ入った。“日本中”ではなく日本そのものが春のマスクを掛けてゐるやうだ。

◎私のことを詠まれてしまった。見事に片方だけ失くしてしまふ。家にゐるときは左右別々の靴下を履いてゐる。いつか揃うのを楽しみにしてゐる。良い方法がないか人に尋ねたこともしたが、その人には笑はれてお仕舞。なほ子さんはそのやうな事はないので誰かの話を聞いて四月馬鹿といったのだらう。

赤座 典子

薬や切れ味のよきエリントン

チエロで聴く中島みゆき鳥曇に

籠り居て「ある晴れた日に」夕霞

◎デューク・エリントンのCDの持ちあはせがないのでユーチューブで久しぶりに聞いた。スウィング・ジャズはジャズに詳しくない私でも懐かしく響いた。季語は若い頃を思つてのあしらひ。

◎中島みゆきのCDの持ちあはせがないのでユーチューブのお世話に。「中島みゆき チエロ」で

検索。メロデーラインをチェロが情緒纏綿と謳ひあげてゐた。アンニユイな気分季語が参加してゐる。

◎『マダム・バタフライ』は持つてゐるのだが探したが出てこなかった。のでユーチューブのお世話に。昨年お亡くなりになられた佐藤しのぶさんと聴いた。季語は夕霞であるが、これを書いてゐるときは梅雨のさなか。ある晴れた日にといつても内容は雨がふさはしいかも。はからずも典子さんの企てで音楽鑑賞をしてしまった。

秋川 泉

目眩めく午後の沈黙春の道

文明や夜桜見んと魔女の来ぬ

無敗なり哀愁漂ふ臯月賞

◎「目眩めく午後の沈黙」は斬新な表現。読者を刺激する。猫も通らぬ午後の春道が浮かんできた。

◎この句、「魔女」を「鷹女」と誤読してゐた。校正子に指摘されてもしばらくは間違へに気が付かなかつた。桜・芝桜・紅葉・凍て瀧・スカイツリーや東京タワー・レインボーブリッジとライトアップに趣向が凝らされてきた。魔女も興味を示すとか。「文明や」は大上段すぎると思ふ。

◎私は競馬に知識がない。しかし好きな事柄を詠むのも俳句を続ける楽しみの一つ。「哀愁漂ふ」

に同好の志ならば共感を得るところだらう。無敗の勝利馬に哀愁の翳を認めるとは。よく競馬の句を作られる作者でなければ詠めぬ境地。

大日向幸江

卯月の夜合せ鏡に背の黒子

鳩居堂夏思はせる香り立て

休校の子供と食べたアイスクリーム

◎自分の寝顔や後ろ姿は直には見ることができない。作者も久しぶりに黒子を見たのかも知れない。

◎銀座鳩居堂に入ると確かにやはらかな芳香に包まれる。作者の嗅覚は繊細だ。夏を思はせる香りとは私には想像ができない。さすがは作者。

◎今年ほどなたも特別な記憶に残る生活を過ごした、いや過ごしてゐることである。

吉津 睦子

頂いた黄薔薇の香り今もまだ

春の午後ベンチに眠る野良二匹

◎初めて作った俳句といふものは自身にとっては大切な記念、忘れがたいものである。わたしもウン十年前の一句を今でも覚えてゐる。そしてその句の裏にあるドラマもその句によって思い起こすことが出来る。

以下は技術的なこと。俳句を耳で聞いてもすつと入ってくることに越したことはない。「黄薔薇」は聞き分けにくいと思ふ。そこで「黄の薔薇」または「黄色の薔薇」に。「頂いた」を少し上品に「頂きし」に。これで五七五に纏めてみる。「頂きし黄の薔薇いまもかをりをり」・「頂きし黄色の薔薇の香る夜」。

◎この句は手を入れるところはない。春の午後にあたたかい日差しを感じる。「野良二匹」で佳いのだがこのみで「猫二匹」ともいへる。

十郎衛吉保

花のあと湯にて楽む菖蒲かな
大椿山滴るやうに見えにけり
豆飯を伝へたき子は遠くあり

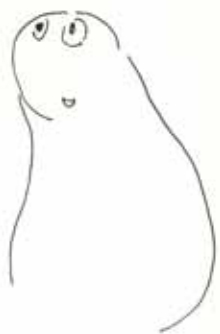
◎日本の行事には植物がついてまはる。年頭の松や竹に始まり、冬至には柚が湯に浮ぶ。農耕民族だからであらうか。掲句に対して野暮なことだが、花を楽しむのはハナシヨウブ。葉に香りがあり

根に薬効があるのはシヨウブ。ハナシヨウブはアヤマ科。シヨウブはシヨウブ科。

◎「山滴る」は夏の季語。しかしこの句の山滴るは季語ではない。大きな椿樹を抱えた山容を讃えた言葉である。大きな句であるが、「山滴る」と云はなくともすむ推敲の余地がある。

◎豆飯などレシピに特別な秘密などあるのかなどと軽んじてはいけない。豌豆と白米、あとは味つけの妙。各家庭の味があるのであらう。せつかく佳い豌豆豆が手に入ったのにと、切歯扼腕といふところ。最後に『あを』の豆飯を少々。

豆飯のよき塩加減夜の句会	田中 藤穂
豆ごはんぶっくり炊けし雨の朝	秋川 泉
おかはりは軽めにしてね豆ご飯	佐藤 恭子



深く

春の芝日々に青みを深くせり
雪女郎守衛の仮眠深くなり
山深く瑠璃鳥の声あとをひく
蝉時雨空の青さを深くせり
人間に深く入りくる鉦叩
山深くまで紫陽花つづく道となり
沖繩慰霊日海中深くある眞水
切り開き苦瓜のわた深く取る
来し方を飛び石として冬深く
姉ひとり深くねむりし十二月
新涼やヨーガで深く呼吸する
野返湖に郭公鳴いて碧深く
サンバイザー深く被りて擦れ違ふ
春光や深くふかあく胸の内
額の花雨に打たれて濃く深く
後山かな根深く立てる冬櫛
夜の雨呼吸深くしてヨガの秋
春の草摘みて笑窪の深くなる

鎌倉喜久恵
定梶じょう
森山のりこ
鈴木多枝子
佐藤 喜孝
鈴木多枝子
佐藤 喜孝
堀内 桂子
須賀 敏子
" "
" "
" "
早崎 泰江
井上 石動
秋川 泉
佐藤 恭子
井上 石動
芝 尚子

龍胆の色の深さや那須連山
夜の深さ紙風船に息を入れ
祖母の家の簷の深さよ冷し瓜
日蝕の宇宙の深さあげは蝶
青空の深さどんぐり落ちる音
郭公や嶺の深さををしへける
婆羅門の肋の深さ暮の春
そと見とは違ふささ糸の深さかな
夏霧の深さを測る石つぶて
さざえ生き海の深さの殻の色

須賀 敏子
田中 藤穂
" "
" "
赤座 典子
篠田 純子
佐藤 喜孝
定梶じょう
田中 藤穂
佐藤 恭子
" "
後藤 志づ
高橋 信佑
早崎 泰江
篠田 純子
須賀 敏子
芝 尚子
渡邊 友七
鈴木多枝子

富岳

如月のずんと富岳や夜があける

深さ

酒蔵の井戸の深さよ柿若葉

夕さればむらさき深し秋の嶽

井が深し炎天を来て覗く時

根津に買ふポインセチアの赤深し

梅雨明けや岸の叢濃く深し

大根引くひりりと走るひび深し

樟若葉盛り盛り萌えて陰深し

春深しついでには借錢でけへんか

ゆふぐれを吸ひ紫陽花の青深し

深田

植糸つめし深田背に聞く草の笛

ふかふか

ふかふかと踏む田畑に芽ぐむもの

歩み止めフカフカフカの夏落葉

ふかぶか

面接のソファーふかぶか花曇

ふかぶかと秋空沈めにはたづみ

ポストに手ふかぶか入る春の宵

ふかぶかと変身願望冬帽子

ふかぶかと腕のみこむ袖湯かな

ふかぶか

ふかぶかの服着た気分小春の日

ふかぶかの帽子と靴で花堤

深爪

深爪や晩夏の湖畔にて痛む
山椒魚深爪の人逝きしのち
少年の深爪万華鏡の色いろいろ
深爪のまだ痛むなり蜜柑むく

深手

深手とはこのくらいかも薬喰
種茄子とおもへるほどの深傷かな

深々

深々と落葉踏む音過ぎし日々
席ゆづられし札深々と春愁ひ

深々と札をかへせる梅雨の人

深々と新樹の闇がひろがき来

深々とお辞儀をしたるマスクかな
深々と虫安らかな草寝床

深まる

母の忌や冬ばらの色深まりぬ

青梅のあを深まりぬ雨しづく

春日受け柑橘の黄の深まり

秋の色深まりて行く九十九折

不況なり色の深まる竜の玉

霜枯て味の深まるキウイの実

雪解晴更地の黒の深まりぬ

木下闇深まりみんな帰りけり

定梶じょう
佐藤 喜孝
佐藤 恭子
田中 藤穂
" "
佐藤 喜孝
" "
早崎 泰江
堀内 一郎
佐藤 恭子
" "
田中 藤穂
七郎衛門吉保

芝 尚子
早崎 泰江
須賀 敏子
森山のりこ
山莊 慶子
須賀 敏子
赤座 典子
田中 藤穂

修道院

秋川 泉

ずっと蒲団で休んでいる。二十歳の頃学生の私は、横浜にあるカトリック修道院の運営する養護施設で実習していた。故あって実習生と云うには長くそこで生活した。夜はガランとした部屋にベッドのある修道院の部屋で休んだ。若く疲れていた私はベッドで休みつつ必ず床に落ちて眠っていた。そして、夢と現のはざまにシスター達の祈りの合唱が響いていた。美しい祈りの音楽であった。後にその心に響く音楽は密教の声明にとでも似ていると感じ、今では夢のように思い出すのである。

夢のベッド

篠田大佳

我が家にはベッドはありません。一時期、僕はベッドで寝ていましたが、ベッドが快適なものだったという記憶はありません。今や完全に布団派です。しかし、収納つきのベッドには惹かれるものがあります。自室は、布団以外は全て物で埋まっているので、収納が欲しいのです。しかし、ベッド設置のためには部屋の掃除が不可欠で、無精の僕は、今日も布団の中でベッド生活の夢を見えています。



萬年床

佐藤喜孝

あやめとはあの字とやの字めの字かな 魚里
和田魚里といふ日本画家で二冊の句集を持つ俳人の句です。とてもわがままな俳人でした。性格もさうですが作る俳句は意表を突く特異な作品が多いのです。

魚里

熱爛や威張らせないと遊ばないぞ
梅雨の酒醫者に醫學を説き始む
税金や苔に匏をかける如
ペレー脱ぎ給え尾長のような利口者

日本画家と書きましたが絵を描いてゐるところを見たことはありません。行くといつも蒲団が敷かれてゐてその上で生活してゐました。老人の鰥夫でしたがなぜか品の良い女人が蔭のやうにゐました。ところが晩年保険のおばさんと結婚し、家を建てかへ連れ子の青年と三人で暮らしはじめました。でも万年床は変らずそのまま。ここだけは譲りませんでした。『平狂』といふ同人誌で毎月蒲団のある部屋で私も一郎さんも句会をしました。

私が一枚絵を求めたことがありました。初めて絵が売れたと素直に喜んでゐました。

魚里

生涯にわたり惜春の如きもの
この句を読むといつも私の中に同じやうに「惜春のごときもの」が流れるのです。そして魚里の無精髭の顔を思ひ出すのでした。

賢い買物 大日向幸江

月の見える窓辺に置かれた三十年以上経ったベッド。病む時も疲れた時も同じ態度でいてくれる。この頃はクッションが気のせいかわらかくなった気がする。持ち主も同じように柔らかく涙もろくなつた。

出来れば私の最後を看取ってほしい。人生で一番賢い買物をしたこのベッド、大事にするよ。



あとがき

句会のお知らせ

阿佐ヶ谷句会

日時 七月七日・火曜日・一時より
会場 阿佐ヶ谷地域区民センター・第七集会室

「あをやぎ句会」

中央区・京橋プラザは八月一日、常態の戻ります。
篠田純子さんからのご連絡をお待ちください。

コロナ明け

食料を買ひに出るだけの穴倉生活からやっと抜け
出しました。句会のお知らせができる喜びを感じて
みます。スマホに厚生労働省のアプリ「COCOA」を
インストールしました。神仏に頼るお守りのやうな
ものです。町へ出かける準備です。でも一番恐れて
ゐるのは歩くことへの不安です。泥縄でも雨が止ん
だら外で歩かうと思ひます。

遅刊

先月より発行日が十日早くなりました。壊れて新
しくしたパソコンもなついてきました。追いついた
ら次は内実です。手紙への返信もだいぶたまってき
ました。目をつぶって体力・気力と兼ね合いをつけ
ながら一歩一歩進んでみます。
(喜孝)

二〇二十年六月号

発行日

六月二十日

発行所

東京都中野区中央2・50・3

電話

090 9828 4244

ファックス

03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト

竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)

あとがき

誹諧

ネットの「俳誌のサロン」に毎日一句俳諧を紹介してゐる。なぜか来訪者が五割ほど増えた。

枕元にはいつか読まうと求めてあつた本が散乱してゐる。メモ書に宗祇法師が云はれた言葉として「連哥は先づ前句を案じ伏せ給へ」とある。この言葉の前後はともかく曲解すると、俳句の作り方に似てゐる。つまり言ひたいこと、述べたいことをしつかり頭の中で整理し、それを伏せて俳句に表現する。明解にさうして句を案じてゐる訳ではないのだが、無意識のうちに似たやうな作業をしてゐるのではと思つた。もう一つメモ帳より。

淡々文集の「富天に贈る示教」の冒頭に「詩は鏝・長刀、和歌は刀、連哥は脇差、誹諧は相口也。(中略) 荆軻は始皇の膝近く寄たり。此時、鏝・長刀・わきざしならば側へよる事なるまじ。短刀を凶に巻たればこそ一念存分はなしたり。此時秦王の佩たる劔の長きよ

りたゞちに抜事あたはず。

まだまだつづくが文芸を武具に例へる意外さに驚いた。俳句を匕首とたとへられると一歩引くがどこかで一理あるかなとも思つた。

最後にいたく気に入つてゐる一句を、

見ると年ふる節分の恋

傾城のいびきかくこそあはれなれ

素丸

(喜孝)

二〇二十年五月号

発行日 五月三十一日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共) / 一年

ゆうちよ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)